

ドイツ民俗学研究史（II）

舟 越 清

四、フランス革命とドイツ民俗学

ユストゥス・メーラー以後、ドイツはおろか、全ヨーロッパのあらゆる分野の変革を決定づけたものは、一七八九年に起つたフランス革命とその後に生まれたナポレオン体制であつて、それはナポレオン体制崩壊後につけても多大な影響を与えていた。

この劇的なフランス革命は、その発生と経緯とすべての人間の自由と平等という、当時としては革命的なスローガン等の内容によって、広範囲のドイツ人に強い反響を起した。とりわけ、当時のドイツのエリートたちは、フランス革命が人間に固有な政治的・社会的諸権利を回復させるもの

のように映じたために、好意的であった。絶対主義体制と封建制度の崩壊にドイツ人が見たものは、偏見のない理想が思いもかけず実現されたことであつた。が、共鳴する度合は、各人各様に異なっていた。血氣にはやる連中はドイツ各地で革命決起集会を行つた。しかし、初めの頃はフランス革命に好感を持っていた人も、例えは、作家であり歴史学者であったヘルダー、ヨハン・ゴットフリート（一七四四—一八〇三）や作家でありジャーナリストであったヴィーラント、クリストーフ・マルティン（一七三三—一八一三）やドイツ最大の作家の一人であるシラー、フリードリヒ・フォン（一七五九—一八〇五）や、ある程度、フランス革命の理念や要求に肯定的だった哲学者、カント、イマヌエル

りしていくと、懷疑的な態度を示すようになった。シラーと並ぶドイツ最大の作家の一人であるゲーテ、ヨーゼフ・ヴォルフ・ガング・フォン（一七四九—一八三二）に至っては全く消極的だった。とはいっても、フランス革命とその革命によって引き起された革命の是否に関する数々の論争によつて、広範囲のドイツ人に政治的関心を呼び起し、その後生じた政治思想や政党組織の土台が醸成されたことは、否定できない。

ドイツの運命にいろいろと直接的な影響を与えたものは、フランス革命そのものより、むしろ、新制フランス、とりわけ、ナポレオン体制と古きヨーロッパ諸国との間に引き起されたあつれきであつて、その思いもよらぬ成り行きは、劇的な規模で政治的領土的状況を完全に変革して行つた。徐々にではあるが、はつきりした形をとつて、十九世紀の十年代のナポレオン体制下で外国の影響の排除、ドイツの独立の回復、国家統一を要求する運動などが生じた。が、この運動の根はさまざまだった。あるものは、ナポレオン体制下で解体された神聖ローマ帝国に熱い思いを寄せ、あるものは、ナポレオン体制下で遠退いた、フランス革命の掲げた理想の実現を計るなど、さまざまであつ

た。が、中でも、ナポレオン体制下でドイツ人が文学や学問や芸術などの精神領域でばらしい業績をあげたことが、ドイツ人の内面に文化創造において第一級の民族であると言い得る自覚が芽生え、その精神的自覚がドイツの民族運動に大きな力となつた。こうした状勢の中にあって、ドイツ民俗学の一方を荷なつた人々は、ジャーナリストであり作家・抒情詩人でもあるアルント、エルンスト・モーリツ（一七六九—一八六〇）や多方面で活躍した作家であり政治家でもあつたゲーレス、ヨーゼフ（一七七六—一八四八）などのようなドイツマン派の人々であつた。他方では、ヘルダーを出発点とする近代的な論理的科学的研究が芽生えて発展したが、その経緯については稿を改めて論述する。

ドイツロマン派の人たちはナポレオン体制下のドイツを、退闊的で断固としたところのない、投げやりで、大いなる欲求に対する能力を喪失した病気に冒されていて、ドイツ民族の自立ばかりでなく、ドイツという名の存続する危機に瀕しているように見えた。⁽¹⁾こうしたドイツロマン派の人たちはメニーザーがあるべき姿として再建を夢見た地方に特有な住民共同体の解体は見えなかつたが、時代に潜む、ドイツにとって危険をはらんだ深淵は感じていた。

その深淵とは、宗教改革以来現出していいたものであつて、民族体を寸断しながら諸民族の間で思考と感情に現われてきた内の世界の亀裂に他ならない。その亀裂はナポレオン体制下で神聖ローマ帝国が諸領邦国家に解体され、領土的野心を基軸に競合関係におかれたライン同盟の中で増幅された。ドイツの存続と繁栄の為には政治的経済的にもこの亀裂は埋めておかねばならぬものだった。こうした時代の危機の中につてドイツマン派の人たちが目指したもののは、古きドイツにある民族性の形成であり、彼らが呼吸したものは、「古ドイツの生活様式の新鮮な朝の空氣」⁽²⁾であり、彼らが夢見たものは、ドイツの伝統的民族性に基づく帝国の新生であった。

この時代に民族性(Volkstum)といふ言葉を創造して、ドイツ民俗学と密接な関係にある『ドイツ民族性の研究』(Deutsche Volkstumskunde)の必要性を誰よりも強調した人が、近代体操術の父と言われるヤーン、フリードリヒ・ルードヴィヒ(一七七八—一八五二)であった。

ヤーンはナポレオン体制下で体操術の意義を兵役前の青年の身体育成の中に見い出し、一八一一年にはナポレオンに対する民衆蜂起や国民総武装やひとつのドイツ国民国家

の樹立を呼びかけている。ナポレオンに対する解放戦争にも参加したが、民族主義的で民主主義的傾向を多分に持つていた為、解放戦争後生まれたヴィーン神聖同盟の復古主義やオーストリアの宰相であったメッテルニヒ、クレメンス・ロタール・フォン(一七七三—一八五九)指導下の王朝派的反動政治を肯んぜず、その為、新しい政治体制に背を向けざるを得なかつた。一八四八年の法兰クフルトで開かれた国民議会には代議員として出席している。

ヤーンは自らの主著である『ドイツの民族性』(Deutsches Volkstum、一八一〇)の中で「民族性」という言葉をいう述べている。

「民族性」とは「民族に共通するもの、民族に内在している本質、民族の行動力とは生命、民族の再生力、民族の生殖能力である。この民族性のお陰で民族の全成員の中に民族に固有のひとつ思考や感情、愛や憎しみ、喜びや悲しみ、苦悩と行動や予感や信仰が働いている。

この民族性は民族を構成する個々の人間すべてを、各人の持つ自由と自立が失われることなく、他の人々と多様に、かつ、全體的に結び付けながら、すばらしい共同体

を結成する⁽³⁾

こうした主旨にそつて、ヤーンは各民族の特性や生活条件などを研究し、ドイツ民族に異質なものをことごとく取り去つた、純粹にドイツ的なものを提示した。

ヤーンの唱えたドイツ民族性の研究は、民族と国家、言語と習慣、教育と人間形成などの重要な思想を含んでいたが、基本的には、ドイツ人に倫理的文化的政治的に共通するものを見い出し、ひとつにまとめることを目指している。為、民族主義的人種的偏見とユダヤ人排斥という危険な傾向を持っていた。そのため、ヤーンの思想は後にナチス・ドイツの「政治的兵士」とか「先駆者」と曲解される運命となつた。⁽⁴⁾

五、ドイツ民俗学における学問的研究の初期

ドイツ民俗学の分野で学問的に、つまり、論理的に民俗学を研究するようになつたのは、コストゥス・メニーザーが活躍していた時代と同じ十八世紀後半からであつた。その動機は単に社会政策的な配慮や国民的な欲求にのみある

のではなかつた。十八世紀の歴史観と深く関係していた。

十八世紀初頭になつて、ヨーロッパの歴史観はスコットランドの外交官であり歴史家で哲学者であったヒューム、ダヴィッド（一七一二—一七七六）やフランスの啓蒙時代の代表的な作家で思想家のヴォルテール、フランシス・メリー（一六九四—一七七八）やフランスの法律学者で歴史哲学者であったモンテスキュー、シャルル・ド・スコンダ（一六八九—一七五五）などによってアウグスティヌスによって確立された神学的歴史観であるキリスト教的救済史観を克服して、近代的な歴史観へ脱皮していった。その発端に立つ人がイタリアの特異な哲学者であるヴィコ、ジョヴァンニ・バッチスター（一六六八—一七四四）であつた。

ヴィコは、歴史的世界は人間によつて作られたものであり、したがつて、人間自身の精神の変化の中に歴史的世界の原理は発見されるし、また、見い出されなければならぬ、として歴史を把握した。ヴィコのこの歴史把握は、言外に、歴史を作る主役は人間自身であつて、神の働きかけによつて作られるのではない、という見解が秘められていた。ヴィコは歴史から神の働きかけを引き離すことによつて、歴史に歴史個々の自然な運動を、自由を与えたのであ

つた。この歴史の人間化こそ、ヴィコが歴史観又は歴史認識の変遷の中で果した最大の功績であった。

ヴィコは歴史を作る主役として個人としての人間より個人を越えた集団としての人間、つまり、民族にウェイトを置いた。人間集団としての民族の方が客観的な形で自己を現わすように見えたからにはかならない。風俗や習慣、言語、文芸、法律、経済やその活動、宗教やその儀礼などの人間生活のすべての領域は、こうした人間集団としての共同意識である民族意識の顕現したものとされた。ヴィコはこうした民族意識の顕現した人間の制度や出来事を人間の本性の成果と見、その根底に永久不変のイデア、つまり、諸民族に共通する本質である神の摂理の存在を見ようとした。ヴィコは民族を中心とした歴史の発展段階として第一段階に神話の時代を、第二段階に英雄の時代を、第三段階に人間の時代を考え、民族の歴史を、この三つの段階を繰り返しながら、終末に到ると考えた。ヴィコの歴史観によつて民族や民族意識や民族精神が前面に押し出されたのであつた。このヴィコの歴史観をドイツで最初に実践した人が、文人であり歴史学者であり、ゲーテの師でもあつたヘルダー、ヨーハン・ゴットフリート（一七四四—一八〇三）

であつた。

ヘルダーとヴィコを結ぶものは、フランスの啓蒙思想家であるルソー、ジャン・ジャック（一七一二—一七七八）の思想であつて、その思想の世界の中にヴィコの歴史に関する理念が含まれていた。ヘルダーは学生時代にドイツの啓蒙作家であるレッシング、ゴットホルト・エーフライム（一七二九—一七八一）やドイツの美術史家のヴィンケルマン、ヨーハン・ヨアヒム（一七一七—一七六七）、あるいは、啓蒙時代に生きた非啓蒙作家のクロップ・ショトツク、フレードリヒ・ゴットリープ（一七二四—一八〇三）などとともに、ルソーの作品も読んでいる。ルソーの思想を通してヴィコの歴史に関する理念に触れる機会があつたわけである。

ヘルダーは、旧ドイツ領で今日ではソヴェト領になつてゐるヨーロッパ東北の都市、リガにいた頃、ルソーの二つの評論を読み、それによって人間と民族の全体的な生の文明化の進展に関する厳しい判断を下したルソーの思想にいたく感動している。その評論の中でルソーは文明の洗礼を受けていない田舎の生活や農民気質を過剰に評価し、理想化していたのである。自然人こそ真の人間であり、文化と文明に浸つた人間はその眞の青春を喪失してしまつたとい

う、ルソーの言葉はヘルダーの心を魅了し、後にヘルダーの作品の中に豊かな果実を実らせることになった。

ヘルダーの歴史的世界の把握に大きな影響を与えた人は、哲学者であり、啓蒙時代にあって反啓蒙的な神秘思想家であった、ハーマン・ヨハン・ゲオルク（一七三〇—一七八八）であった。ハーマンは自己の宗教的経験から人間を感じと感情の存在とし、言葉を遍在する神的・精神的本質の非合理的象徴と見、人間の経験の表出は書物や雄弁よりも絵画や歌の方が発生的には古いとした。ルソーの自然人とハーマンの歌や絵画や言語に対する把握は、やがて、一七六年のリガの近くの農村のヨハネ祭の体験を通して、ヘルダーの歴史的世界の発展の始源に位置づけられることになった。

この体験の後、ヘルダーは近代の風習に全く染っていない現存諸民族の間に残されていた古代の歌や韻律、舞踊や慣習や宗教儀礼などの「生きた名残り」の研究に没頭することになった。その研究対象が「集団の歌」（Kollektivpoesie）であって、その歌を通してヘルダーはハーマンの影響もあって詩的なものの精神を、創造的な神秘の精神を把握しようとした。

ヘルダーはスコットランドの詩人であるマクファーソン、ジエイムズ（一七三六—一七九六）によって誤つて伝えられた『オシアン』やイギリスの司教で編集者であったペーシィ、トーマス（一七二九—一八一一）の『古代イギリス詩人拾遺』やフランスの哲学者であるモンテニュ、ミシェル・ド（一五三三—一五九二）の『エゼー』に刺激されて、一七八八年から一七七九年にかけて諸民族に伝えられる古い民謡の収集に取りかかり、『民謡集』（Volkslieder）⁽⁵⁾を出版した。この『民謡集』は一八〇七年以後は『歌謡における諸民族の声』（Stimmen bei Völker in Liedern）とされたが、この中にヘルダーは諸民族の歌謡の他に、ショーケスピアやバロック時代の創作抒情詩をも収録した。ヘルダーが諸民族の古き歌謡の収集に努めた背景には、ヘルダーのリガで一七六五年ヨハネ祭の夜に体験した諸時代のあけばのとも言える原始人的現象、歴史の本来の発生、言うなれば、「民族の心」（die Seele des Volks）を知るというねらいがあった。歌い踊る原始人はヘルダーにとって歴史的生の始源に見えたからにほかならない。そういう意味でヘルダーが歌謡を中心とした民族遺産に目を向け、民族の風習や踊り、伝説やメルヒエンを重要視したことは、誤

りでなかつた。

ヘルダーの指摘で心を動かし、民謡収集に努めた一群の人たちがいた。歌謡作家のボイニ、ハインリヒ・クリスチアン（一七四一—八〇六）、田園詩人のフォス、ヨハン・ハインリヒ（一七五一—八二六）、抒情詩人で物語詩人であるビュルガー、ガットフリート・アウグスト（一七四七—一七九四）、抒情詩人でジャーナリストのクラウディウス、マツティアス（一七四〇—一八一五）、それに民謡収集家のエルウェルト・アンゼルム、フリードリヒ・ダーフィット・グレーターなどがそれである。が、やがてこれらの人たちは、十八世紀に生れた世界市民思想の影響の下でヘルダーが研究に打ち込んだ人間性と関係のある『素朴な』（primitiv）詩から離れて、ドイツ民族の共有遺産に目を向けるようになつた。ヘルダーは一七七三年にゲーテやメモーザーとともに『ドイツの特性と藝術に関する冊子』（Die Blätter von deutscher Art und Kunst）を出版し、その中で民族の特性の重要性を述べてゐる。ヘルダーの思想に転期が現われる」とになる。

一七八〇年代になると、ヘルダーは人類全体の始源、歴史成長の根源、あらゆる生命を湧出させる創造の泉から多

種多様の民族の形式へ関心を移している。全民族を包含する人類という大木からいかにしてあまねまな民族という大小の枝が生じたかという問題にヘルダーの思索は向けられた。とりわけ、ドイツ民族の精神的發展の研究に没頭した。その成果が『人類の歴史哲学のための理念』（Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit, 4 Bde. 1784—91）であった。歴史的現象である諸民族の初期の詩歌や踊りより得た、原民族が地理的氣候風土的諸条件などで相互に触れ合い防衛しあい、引きあい反発しあい、愛憎する中に各種の民族の生成へ展開する過程に、ヘルダーは人類發展の自然法則を見るのであった。それ故、ヘルダーはこの作品の中で、「人類の歴史哲学は、その名にふさわしいものにしようとするなら、天空から始めなければならない」。この地球は星々の中のひとつ「星だから」と言って、この作品を第一部で地球の生成の由來から始めている。そして第一部では諸民族の母型が各民族の置かれた地理上と氣候風土上の諸条件と民族を構成する人間の肉体と精神の多様な特質とによって形成されることを展望し、第三部と第四部は中世末までの諸民族の發展の歴史が人類史的な觀点から描かれている。民俗学研究はヘルダーの歴史観の中で歴

史の始源と発展の交点で重要な位置を占めたのであった。

六、ドイツマン派とドイツ民俗学

ドイツマン派の時代は、すでに述べたように、フランス革命を経てナポレオン体制下のヨーロッパの政治情勢と重なる時期が多く、その由来や展開もこうした政治情勢と無関係ではなかった。無時間の魔術に魅せられ、遙かに遠い過去に慰めを求めて心の高揚を体験し、救いさえ求めた、ドイツマン派の諸傾向は、この時代の諸事情から必然的に生まれたものにはかならない。そして、ドイツマン派の人々がドイツ民俗学の分野で果した最大の成果は、時代思潮と関係のあるドイツの民族性 (Volkstum) の形成であった。

民族性という言葉は、クルーゲの語源辞典によれば、「ドイツの教育者で文献学者のカンペ、マヒム・ハインリヒ (一七四六—一八一八) が volkseigentümlich (民族全体に所有されるべきもの) を national (民族の) として、Volkseigentümlichkeit (民族全体に所有されている心的傾向) を Nationalität (民族性) として使用した」といあひ、その後、ヤー

ンが Volksthum, volksthümlich, Volksthümlichkeit というドイツ語を造語して、自著の『ドイツの民族性』の予約注文の宣伝に用いて、定着させた。⁽⁸⁾ ヤーンと類似の傾向を持つゲレスやアルントのような人達は、彼らの生きた時代が変質しているように見え、その変質した時代をはつきりと見て、大古の時代のドイツ民族の精神から、つまり、ゲレスの言葉である「神聖な民族精神」から当時の現実を新しく作り変えようとして、民族精神によつて作り出され、形成された民族遺産の広範囲な領域を包括的に研究する」と打ち込んだのであった。アルントやゲレスのような人にとって、ドイツ人の生命は「その神秘に満ちた根っこから再び新鮮な芽をふき、永遠に古くて新しいものに覺醒し名譽を回復する」ことになつていたのであった。

ドイツマン派の抒情劇作家で詩人で後期ロマン派の詩人たちの指導的な役割を果した、ブレンンターノ、クレメンツ・マリーア (一七七八—一八四一) とアルニム、ルードヴィヒ・ヨアヒム・フォン (一七八一—一八三一) とは共同して、広範囲にわたつてドイツの歌謡 (Volkslieder) の収集をして、一八〇六年に『子供の不思議な角笛』(Des Knaben Wunderhorn) を出版した。これはその後増補されて一八〇

八年に三巻となり、更に、しばらくして歌謡に不可欠の楽譜が補われた。この楽譜の増補は音楽家のルードヴィヒ・

エルクの精魂を込めた畢生の仕事となつた。「歌謡の本質は歌だ」というヘルダーの言葉が示すように、歌謡では音樂が重要な意味を持つていた。

ルードヴィヒ・ケンスはドイツ民族精神を知る意図で騎士物語や童話、伝説などの読み物を集め、「ドイツ民衆本」(Die Deutschen Volksbücher)の仕事に熱中し、一八〇七年に刊行した。その後、グリムの童話で有名なグリム兄弟が『子供と家庭の童話集』(Kinder- und Hausmärchen)を一八一一年に、また、『ドイツ伝説集』(Deutsche Sagen)を一八一六年に出版した。両者はともに、ドイツ各地にある類似した言い伝えを多数収集して、手を加えたもので、この分野の金字塔的作品となつた。この他に、兄のグリム、ヤーハ (一七八五—一八六三) は『ドイツ神話学』(Deutsche Mythologie) を一八三八年に出版して、ドイツの民間信仰に新しい解釈を与えたが、同じ頃に、ドイツの民間信仰を研究した人に F・L・フォン・ルーベネックがいた。彼は一八一五年『ドイツ中世の民間信仰と英雄伝説』(Des deutschen Mittelalters Volksglauben und Heroensagen) を公

けにしている。

こうした民間信仰に対する研究活動は、民間衣装にも向けられ、一七九三年から一八一五年にかけてこの方面的研究は豊かな成果をあげている。K・F・クロンヒーゲルは『アルテンブルク地方の農民の衣装と風俗習慣について』(Über die Kleidertradition, Sitten und Gebräuche der Altenburgischen Bauern) を一七八二年に著し、今は東ドイツ領のハイデク・カルル・マルクス・ショタット (田舎者) の手を結ぶ線の中間地點にある古い町、アルテンブルクに伝わる農民の生活状況を今日に伝えている。アロイス・ショトライバーは一八二五年頃にすぐれた作品『ドイツ民族の衣装と民間祭礼と特有の職業』(Deutschlands Nationaltrachten, Volksfeste und charakteristische Beschäftigungen) を残し、当時のドイツ民族、むらわび、西独バーデン地方の風習や祭礼を詳しく調査した成果を書き残している。ドイツ全体を対象にした民俗学を取りあげた人は E・ド・カラードであって、彼は一八四五年から四七年にかけて『方言、風俗、慣習、祭礼と衣装を見よドイツ民族』(Das deutsche Volk in seinem Mundarten, Sitten, Gebräuchen, Festen und Trachten) という作品を書いて、ドイツ人の風

俗や慣習などを総合的に取り扱っている。

ドイツで民俗学の雑誌の創始者はロマン派の人たちで、例えば、「寂寥の慰め」(Tröst-Einsamkeit)と称したハイデルベルク派の人たちは、一八〇八年『隠者の新聞』(Die Einsiedler Zeitung)を刊行し、中世の写本の中で忘れられていた美を取り上げて、十九世紀初頭の人々に接近させようとした。しかし、これらの民俗学の雑誌は文芸的であって、学問的なものではなかった。学問的な雑誌の刊行はずつと後のことであった。

ドイツロマン派時代のドイツ民俗学に対する関心の高まりで、ドイツ民族の風俗習慣などが明らかになって、民族精神の形成の上でドイツ民俗のウェイトの大きさが認識されるにつれて、ドイツ民俗学は他の学問分野の研究活動にも少しづつ影響を及ぼしはじめた。例えば、ドイツの法学者であるザヴィンジ、カルル・フリードリヒ・フォン(一七七九—一八六一)は当時の法学教育の主流であった合理的な学説に対し民俗学的成果をふまえて対抗した。彼は一八一五年に『立法と法学に関する現代の使命について』(Vom Beruf unserer Zeit für Gesetzgebung und Rechts-wissenschaft)を公けにし、合理的な法学説に対して法律は

民族精神からおのずと生まれてくるものというテーマを立てて、『ドイツにおける一般市民法の必要性について』を一八一四年に公けにして、市民法の制定を要求したテボー、アントン・フリードリヒ・ニストゥス(一七七四—一八四〇)に対峙した。ザヴィンジの法に関する自然発生論はドイツの哲学者、ヘーゲル、ゴルク、フリードリヒ・ヴィルヘルム(一七七〇—一八三一)の思想にも通じるものがあつた。ヘーゲルの創造世界においては、民族精神は歴史的哲学的意識的形而上学的な価値の原理として体現している。ヘーゲルの概念は「世界精神」からの流出であり、「世界精神」と感覚的な現実の間をつなぐ観念的な糸にぎなかつたり、時には、諸民族の生そのものを生成する真に精神的な原動力など、さまざまな色彩をとつて輝く、と言つたぐあいである。民族精神を通してドイツ民俗学は法学にも深くかかわっていた。

ドイツロマン派の人々の中にはドイツ民俗学を通して民族に固有なもの一切に対する燃えるような興奮が渦巻いていたが、その興奮はドイツ民族に関する考え方と結びついて、熱狂へと発展した。その灼熱した輝きの前ではドイツ古典主義の人道主義的な理想やその芸術的見られる均

齊のとれた美などは色褪せてゆくようと思われた。それをドイツの国文学者であるマイアーニ、ジョン（一八六四—一九五三）はこう述べている。

「ドイツ民族が以前身に纏っていた乞食のマントの代りに、いま、ドイツ民族に着せられているのは、王のマントだ。その頭にあるのは、王冠だ。王冠の輝きは、天から直接やつてきた恩寵の中で授けられるものであつて、人間の手によるものではない。これまで上流階級の人々を着飾つていたキンモールや黄金は、一切その輝きを奪われた。」

ドイツロマン派の人々の目には、彼らの生きた時代のドイツは、もろもろの外来の思潮や政治情勢によつて古来から受け継がれて、血となり肉となつていていたドイツ的なものを忘却しているように映じたのであり、その忘却の重き過失によつて変質させられたドイツを救済する為に、ドイツ民族固有の文化遺産に内在する、古き良きドイツ精神を再来させ、それによつて、変質されたと見られたドイツを蘇らせて、古くて新しいドイツを実現することを考えたのである。このドイツ救済思想はその後ドイツロマン派の人々以上に燃え上ることはなかつたが、その思想はドイツロマ

ン派の時代が終焉しても、ドイツ人の精神にその後も長く燃え続け、今日にも生きている。ドイツロマン派の人々をして歌謡や民話や伝説を収集させ、数々の集成を残させたものは、実は、ドイツ救済思想にほかならない。したがつて、ドイツロマン派の人々の手によつて収集されたものは、彼らが狙いとして定めたドイツ民族の精神、つまり、「ドイツ民族の魂」を認識する為の手段にすぎなかつた。民族遺産を包括的に分析、社会学的、歴史学的、心理学的、地理学的な学問分野と関連させながらドイツ人の内的世界の特性を認識しようという意図はなかつた。

グリム兄弟は一八一六年にゲーテに「ドイツ協会」(Deutsche Gesellschaft)の設立を提案し、主旨を説明したが、実現するに至らなかつた。「ドイツ協会」が設立されて活動していたなら、その協会は広い意味でのドイツの古代文化遺産の収集を行つていたと思われる。この協会では特に、いなかの坊さんたちが、結婚式や葬儀などの際のドイツ民族の風俗や諸慣習、とりわけ、伝説や歌謡の類を収集することになつてゐたが、この協会が日の目を見なかつたので、当時ドイツ民謡になお生きていた広範な無形の文化遺産の収集も露と消える運命になつた。(「自然と超自然」

(社)

- (一) Schlegel, August Wilhelm von: Kritische Schriften und Briefe. 7 Bde. 1962ff. 5. Bd. S. 204.
- (二) Arnim, Ludwig Achim von, und Brentano, Clemens: Des Knaben Wunderhorn. 3 Bde. Berlin. 1928. 1. Bd., S. 474.
- (三) Jahn, Friedrich: Deutsches Volkstum. In: Werke 3 Bde. 2 Bd.
- (四) やの他は、民俗学の領域を犯罪分野に導入し、民族の生活と犯罪や裁判との関係に新見解を示した人だ、クロブ、ハーベ（一八四七—一九一五）がいる。クロブはオーバーマニアのクーネーに一八四七年に生まれ、シャルノカッヒュンゲルの大学で犯罪学分野の教授を務めた人で、犯罪捜査を科学的に行なう犯罪捜査学を独立した近代的な學問として創設した人として知られている。クロブはクーネー大学に犯罪捜査の研究を主体にした学科を創設した。一八九八年以後「犯罪人間学」と犯罪捜査学アルヒー（Archiv für Kriminanthropologie und Kriminalistik）の編集に携つていた。
- クロブは北ドイツの都市、ホルト・シットルクのある裁判所に携つていた。

で、民衆の生活に無知であった裁判官が宣誓を拒否した妊婦に民衆の納得しない判決を下しているのを知つて、民俗学と犯罪に興味を持った。妊婦が裁判で宣誓を拒否した理由は、母親が子供を身にもつてゐる時に宣誓をするか、そのおなかの子供は誕生後いつも裁判とかかわるようになると、いくら迷信によるものであつて、この迷信を裁判官が知つてこない、妊婦に不利な判決は下せなかつたと、クロスは見る所以である。犯罪ないし裁判と民俗学がオルデンブルクの裁判で関係していたのであつた。同様のところは、イッの各地に見られたのであつて、裁判は、時として、民族のこうした風俗習慣を十分に配慮し、からむか、刑法では民族の特性、その世界像、それに慣習による適宜に対処する必要があると、クロスは見た。

医学の分野でドイツ民俗学がかかるのであるのは、民間で流布している治療法であつて、その治療法は聖書に書かれているキリストの病気治療に見られるように、迷信に基づく魔術的な治療法である場合が多い。しかし、それは上イッの民俗を示すものであつて、その方面的民俗学的研究は、エーリッヒは「民間療法」（Volksmedizin）としてかなりある。むへんか、実際の医療活動や民間療法が役立つてゐている例は、極めて少ない。法医学が、やがて医者の監視の為、民間療法に关心を持っているにすぎない。

学校教育における、ドイツ民俗学はその知識や諸成果を通じて教師の教育活動に貢献してきた。使用された教材

は歌謡や伝説や諺諺など、それに風俗習慣などの民族遺産だが、やうした民族遺産に基づいて生徒に育成されねばならぬとしたのが、ドイツ民族の精神的統一であり、ドイツ民族内にある精神的亀裂を克服する所であつた。

十九世紀後半におけるドイツの工業化の進展で地方の農民文化は、消滅の危機にひんしたが、「農村の社会福祉事業協会」の設立者であった、ハインリッヒ・ハーナンハイマーの努力で危機を免れた農民文化の再興が計られた。

その他、ドイツ民俗学の政治的傾向は広範囲にわたっておらず、それは必要な時に過ぎないに過ぎない。

(15) 「歌謡」(Volkslied) ドイツの語せ】やや〇四の初め頃にヘルターがはじめて創作した曲葉である。ヘルターなどによる民族にあたるドイツ語 Volk が、ぜんそく未開民族(Naturvolk) あふる、ヘルターの心のいいところへ「非政治的民族」(unpolitisches Volk) を意味した。

(16) 一七八七年ヘルターは『ヤギュックスムーハの平均的な諺作の類似性』(Von Ähnlichkeit der mittleren englischen und deutschen Dichtkunst) ふくらせる。その中で各民族の遺産の重複性をおぼげられて。(17) Herder, Johann Gottfried: Ideen zur Philosophie

der Geschichte der Menschheit. Im Herders Sämtliche Werke. Bd. 13. Berlin, 1887. S. 13ff.

(18) Kluge, Friedrich: Etymologisches Wörterbuch. Berlin, 1963. S. 826.

In: Dichtung der Romantik. Die Welt der Romantik. Wiesbaden-Berlin. S. 145.

民族の宗教と魔

A. Stoldt: F. L. Jahns deutsches Volkstum von 1810. 1937.

V. Kettel: Volksfeste und Volkstrachten bei F. L. Jahn. Köln 1935.

A. Löwenstimm: Aberglaube und Strafrecht 1897.

K. Schefold und E. Werner: Der Aberglaube im Rechtsleben. 1912.

A. Hellwig: Verbrechen und Aberglaube. 1908.

F. Chr. B. Avé-Lallenant: Das deutsche Gauner-tum. 4 Bde. Neubearb. v. Bauer 1916.

M. Rade: Die religiös-sittliche Gedankenwelt unserer Industriearbeiter. 1898.

T. Kühn: Skizzen aus dem sittlichen und religiösen

Leben einer Vorstadt. 1904.

E. Lehmann: Von der Seelsorge im Volke. 1938.

W. E. Peuckert: Kirchliche Volkskunde, in: Zeitschrift für Kirchengeschichte 58. 1939.

Jos. Weigert: Religiöse Volkskunde. 2./3. 1925.

H. Schauerte: Die volkstümliche Heiligenverehrung. 1948.

M. Rumpe: Religiöse Volkskunde. 1933.

H. Grabert: Der Glaube des deutschen Bauerntums.

1939.

W. E. Peuckert: Leben im Volk. Grundsätzliches zur Frage der Volkserziehung. 1930.

H. Sohnrey: Wegweiser für ländliche Wohlfahrts- und Heimatpflege. 1938.

E. Kück und H. Sohnrey: Feste und Spiele des deutschen Landvolkes. 1929.

H. Sohnrey: Wegweiser für das Land zur Gestaltung und Bereicherung des dörflichen Lebens. 1939.

Handwörterbuch des Grenz-und Auslanddeutsch-tums. Hrsg. von C. Petersen u. a. 1933 ff.

Bibliographisches Handwörterbuch des Ausland-tums. Hrsg. von Deutschem Auslandinstitut Stutt-

gart. 1932 ff.

R. Bahr: Volk jenseits der Grenzen. 1933.

E. Barta und K. Bell: Geschichte der Schutzarbeit am deutschen Volkstum. 1930.

M. H. Boehm: Die deutschen Grenzländer. 1930.

E. Piffl: Deutsche Bauern in Ungarn. 1938.

H. Moser: Alte schwäbische Volkslieder aus Sathmar mit ihren Weisen. 1953.